
契約に御用心

ラッキーライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約に御用心

【Zコード】

Z6479Q

【作者名】

ラッキーライン

【あらすじ】

「契約せしものよ。Jの契約を誓うか？」

「はい……。」

主人公、佐奈は「ぐぐふつうの中学生だ。しかし、変な夢を見てからなんと四次元の世界に迷いこんでしまった。
そこには、変な性格の王子やイケメンの誘拐犯が……？！」

第一話『因次元に迷ひにんだトキ』

「契約を誓いし者よ……そなたが13歳になると……必ず『』の地に戻るつて来る」と誓つか?」

「はい……誓います。」

ジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリジリ~~~~~
~~~~~

田覚ましが鳴つていて。こつもの朝だ。

「んー。はあ。また同じ夢。なんなんだい?。」

私、佐奈は最近同じ夢ばかりを見ている中学生だ。

「もつづーほんといやつー『契約を誓いし者よ』ってなんの契約よ!

もちろん、契約なんかした覚えはない。だから不思議なのだ。

「しかも、なんで13歳なのーはあ、よりによつて今日は……」

そう、今日は13歳の誕生日なのだ。

「佐奈ー。朝♪はんよー。早く食べないと遅刻するわよー。」

「はーい。」

(はあ…………。いやな予感がある……。)

「行つてきます。」

「こつてらつしゃーー！」

靴の音ばかりがこだます。

「はあ…………。」

私はさつきからため息ばかりついている。

(ああ。こんなに誕生日がいやになつたことなんて一度もないよ……。ん?なんだあれ?)

私が見つけたのは……。四角い箱。立方体で一辺が一メートルくらいの白い箱。フタが開いている…………。

(なんだ。何も入つてないじゃん。よかつた。)

私は何も入つていないと確認すると、また歩き出した。が、その時見事につるつと滑つて箱のなかへ。

「きやああああ…………。」

その声もむなしく私は頭から箱に突つ込んだ。

(やばい。頭打つ!)

そう思つたが案の定頭はぶつからずそのまま、真つ逆さまに落ちて行つた。

ぼふつ

私は柔らかいベットへ落ちた。

「いつたあ。てかここじどい。」

そう。私が落ちたところはまったく知らない場所だった。壁は真っ白で何となくお姫様の部屋のような感じだ。

「はあ。ほんとここどこだら。」

私がつぶやいたその時だった。

「佐奈。よつこじわ。」

と後ろから声がしたのだ。

「あなたさだれ…」

恐る恐る振り向くとそこには立っていたのは夢に出てきた人だったのだ。

「僕の名前は輝。ここの一応王子や。」

その、王子と名乗る輝は私と同じくらこの身長で顔は結構イケメンの男のだ。

「ここいつて……、だいたいここはどこ?私はなぜここへ落ちたの?しかも、どうしてあなたは私の名前を知っているの?」

「まあまあ落ちついて。じゃあまずここはどこかといふとかから説明するよ。

ここは、簡単に言えば四次元の世界。ここに住んでいる者達は全員時間が操れるってわけだよ。」

「へえ。だけど、それだけじゃ私が来たわけと繋がらないわよ。」

「まあ、続きを聞いていれば分かるよ。」

それで、全員時間が操れるから当然悪いことをするやつもいるんだ。

でもある人がいるだけでそういう悪いことができなくなるんだ。で、そのある人つていうのが貴女、佐奈なんだ。」

「わっ私？！」

思わず声が裏がえる。

「まさかそんなはずないじゃん。それになんで私なの？！」

「それは、佐奈が幼い頃にここへ来て契約をかわしたからだよ。右手をかして『らん。』」

私は言われた通り輝の方に右手を出した。

「じゃあ。今から契約のあかしを見せるよ。」

そう、一言言つと輝は小型のライトを私の右手に当てた。

「あつ…………。なにこの模様？！」

「『』の模様は『』の世界の紋様の様なものだよ。」

「つそ…………。」

「いいんだよ心配しなくて。『』の模様はライトを当てなければ見えないから。」

そう言つて輝はライトを消した。

「佐奈。貴女は何もしなくてもいいんだ。この世界にいるだけでいい。そうすれば悪いやつらは何もできないんだ。」

「でも、お母さんが心配するし…………。帰らないと。」

「それは大丈夫。こちらの一年は向こうの一秒だから。」

「でも…………。」

「お願いだ！この通り！たのむ！」

輝は私に土下座をしてお願いしてきた。

迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う  
迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う迷う…。

何回も何回もぐるぐると『迷う』と『』言葉がめぐる。

向こうにはお母さん、学校。

こからには輝、国民。

「…………。わかった。とりあえず三日だけいてそれから先は私

が決める。」

「ありがとうござりますー寝泊まりせーの部屋を使ってください。あと、この世界を自由に散歩してこよ。じゃあー！」

（まあ、仕方ないか。あてとまあせーのお城から探索しよう。）私はそう思いましたこの部屋から出ました。

『ギギギギギギギギギギ』

木の扉を開けるとそこには長い廊下があった。

「うつわー！長い廊下ー。ですがお城！でも、どこに行ひー……。あつーあそこにはメイドさんが！聞いてこよ。」

私はたまたま通りかかったメイドさんにて聞いてみることにした。

「あのー。このお城に面白ことありますか？」

私が恐る恐る聞いてみるとメイドさんはこいつに笑つて

「図書室に行つてみては？」と答えてくれた。

「あつがどうぞります。」

私は一言お礼を言つと図書室へ向かつた。

「えーと、まづこじを右にまがつて……。」

私はさつきのメイドさんがくれた地図を見ながら図書室を探していった。

「…………えつと、確かこの辺りなんだか……あつたつー。」

『ギギギギギギギギギギ』

重い扉を開けるとそこには沢山の本棚が並んでいた。

「すじー…………。」

そじ、すじーのだ。私が通つている学校の図書室よりも、町の図書館よりも、もっともつと広い。

（流石お城！規模がちがう！）本好きの私にはとてもうれしい所だ。

「何を読もうかなー。」

奥の方には推理小説、手前方にはファンタジーもの。どちらも好きだがファンタジーの方がどちらかといふと好きだ。

「佐奈。図書室はどうう？広いだろ。」

いきなり声をかけられ少し驚いたがすぐに声の主はわかつた。

「うん。まあね。……それよつどうして私がここにいるってわかつたの？」

そう聞くと、輝はにっこりと爽やかな笑顔を浮かべてこいつ答えた。

「野生の感かな？」

「んなわけないだろー！」

私は声が枯れるくらい大きな声で怒鳴った

## 第一話『四次元に迷ってんだトキ』（後書き）

いつも、こんなに忙は、または初めまして。ラッキーラインです。この小説を読んで下さってありがとうございます。私はもう一つ連載を書いています。しかし、なかなか読んでもらえていません。もしよろしければそちらもどうぞ！

では、また次回！

## 第一話『なんなんだら』の世界』（前書き）

### 注意

お説教が多いため、「がみがみ」という言葉が多いです。

## 第一話『なんなんだら』の世界』

「まあまあ。冗談だよ[冗談。佐奈みたいな反応初めてみたよ。」輝はそう言つとクスクスと笑つた。

『ブチーン』

私の頭の中になにかが切れる音がしたよ[つな氣がする。

「輝つ！…あんたね～！！」

お説教開始…………！

がみがみがみがみがみがみがみがみがみがみがみがみ  
がみがみがみがみがみがみがみがみがみがみがみ  
がみがみがみがみがみがみがみがみがみがみがみ  
がみがみがみ

お説教終了…………！

「…………『めんなさい。』

「よのし～～」

「本当は城のメイドに聞いたんだよ。」

まあ、普通はそうだろう。野生の感だつたら逆にすごいが。

「今度そういうこと言つたらもつとお説教するから覚悟しなさい！」  
「わかった。あつ、だけど興奮してる時は分かんないかもしれないから」

「興奮つて・・・・・。あんたがどうこう時に興奮するか分かんな  
いし！」

「う～ん。たとえば、おもちゃを買つてもうつた時とかかな。」

「ふ～ん。意外と幼稚なのね輝。」

少しだけ輝を見損なつたきがするのは気のせいだろうか。確か輝は  
私と同い年だつたはず。そしたら、余りにも幼稚すぎる。思わず私  
は輝をまじまじと見つめた。

「なに？僕の顔になんかついてる？あんまり見つめられると照れる

んだけど。もしかして僕のことを・・・・・。

んなわけないだろ

! —

「本当に」めんなさい。」

「まあ、許してありますな。」

でもかう。私も鬼では一。

でも、金谷定はひどいなあ。僕、顔には結構自信あるのに……。

輝の今の発言で輝がナルシストになりかけているのが分かつてしまつたかもしねない。また、さつきと同じよつにまじまじと輝の顔を見つめてしまつた。

•  
•  
•  
•  
•  
○  
—

たからで言ひてんたゞ

卷之三

# お説教開始

• • お語教絵

もういい！私、街を散歩してくる！

ハタンチー

和は勢いよく図書室の扉を閉めた

（キハ瓶が何で知りたい）

卷之三

アーティストが議題に取り上げる

「一  
行  
つ  
て  
き  
ま  
す。」

まだ、この時は知らなかつた。自分が誘拐されるなんて

## 第一話『なんなんだらりの世界』（後編）

すいません。だいぶ、前回と間が空いてしまいました。今度はなるべく気をつけます。  
では、また次回！

## 第二話『佐奈、イケメンにさがわれる』

「まつたく・・・・・！輝の奴め！危つく声が出なくなる所だった。

「私は、今街へ向かっている。城を出た後少し道に迷つてしまつたが、農家のおじさんにお聞きなんとか遭難せずにすんだ。

「確かに、もう少しで街が見えてくるはずなんだけど・・・・。あつ！あれかなあ。」

目の前に見えてきた街は、なんというか色合いで微妙だった。街の南側は赤系の色の建物。北側は緑系の色、西側は白系の色、東側は青系の色の建物だった。

「変な色・・・・・・・・・。

「そうだよなあ。俺もこの色合い嫌いなんだあ。」

「そうよね・・・・・・・つてあんた誰！？」

私はギョッとして後ろを振り返つた。そこにいたのは案の定知らない男だった。しかしこの男も輝に負けないくらいのイケメンだ。少し焼けた肌にこげ茶の髪。山賊風の服を着ていてなんとなくワイルドな感じだ。

「『あんた誰』は酷くないか。……俺の名前は一夜。よろしくな。」一夜はにっこりと優しく笑つた。一夜は輝よりくだらないことを言わないよしな気がする。私は先ほどの様にまじまじと一夜を見つめた。

「何？……あんまり見つめられるの慣れてないから照れるんだけれど。」

「れど。」

「ポッ

「ワザトデスヨネ？」

私は、黒い笑顔を浮かべて聞いた。

「あつちがうちがうーわざとじやないない。」

「ワザトデスヨネーーー！」

「一々えーーえーー！」

—テヌヌネ！！！！！

七  
九

「ま」

頭のどこかが切れた気がする。やはり、一夜もくだらない奴だった。これは一つお説教しなければ。

一夜

ノルマニヤ

1011

「まあ。いいよ。

和はそこ一夜は出でると街へ歩き出だが、その時

「廿一〇」

予想外のことに驚いたがすぐに一夜に別れを告げようと、口を開い

「えーと。もう行かないといけないから……。  
……しようがない。行つていいよ。だけど、これは飲んで。  
」

「じゃあ、行くから……」  
「一夜が渡してくれたのはおいしそうなぶどうジュースだった。私は何も言わずそのジュースを飲み干した。

そう言いかけてふりつと倒れそのまま寝むつてしまつた。

「じめん…………。」

一夜の声が静かに響いた。

「…………からかい過ぎたかな…………。」

僕はふわふわのベットに腰を下ろした。つい、からかつてしまつた  
がやり過ぎたかもしれない。

「かわいかったなあ。困った顔。」

佐奈は困ると、とてもかわいい。こんなことを思つ僕はかなりのS  
かもしれない。そんなことをふと考へていると、急に扉を叩く音が  
した。

「どうぞ。入れ。」

「王子！大変です！佐奈様が一夜と黙つものにさらわれました！」

「なんだと！」

一夜と言えば一人しか思い当たらない。それは大変だ。

「すぐに、僕が助けに行く。おまえは援護を呼んで来てくれ！」

僕は棚にある拳銃を取り急いで佐奈の元へ向かつた。  
(頼む佐奈。無事で居てくれ…………。)

「かわいい寝顔。俺なんかが見てよかつたのかな。あははは……。」

間抜けな笑いをした後俺はそつと佐奈の頭を撫でた。

「本当は元の世界に帰そうと思つたんだけど……どうしようつかな。予想よりかわいいなんて……。」

まあ、ぐちぐちとお説教をされるのはいやだが。

「でも……佐奈には不幸になつてもらいたくないな。……………」  
そういうえばもう城には伝わつたかな。輝の奴焦つてるだろ? まつあいつには負けねえけど。」

そういうながら俺は弓と矢を磨ぐ。

「もうすぐ敵がくる……」

「そう、もうすぐだ……。」

## 第二話『佐奈、イケメンにさりわれる』（後書き）

いつも、ラッキーラインです。さて契約に御用心も二話目です。早いですねえ。びっくりです。しかしながら大変なことになります。でも、今更拳銃と『矢だったら拳銃の方がいいんじゃ』と思っています。まあ、実際はわかりませんが。

今回のお知らせがあります。今度の四話目が終わったらなんと番外編をやります！急ですがやります！理由は本編でやれないことをやりたいからです！どんどんリクエスト聞きます！

後書き長くなつてすいません。ではまた次回！

#### 第四話『俺の姫君、僕の姫君』

「佐奈、起きないなあ。もしかしたら薬の量まちがえたかもな。」「うん。だけど、主人がまちがえたりするのかな。」

「さあね。」

ひそひそひそひそ

また、あの三匹が自分の悪口を言つてゐる。

「おい！俺がまちがえるはずがないだろ？」「ウ、ライ、コウ…」「すいません。」「「めんなさい。」「すいやせん。」

俺は一喝すると佐奈のもとへ向かつた。

佐奈のいる部屋は、この家の一番奥にある少し広い部屋だ。

「まったく、あいつらときたら……」

そうつぶやきながら佐奈の頭をなでる。佐奈の髪はふわふわしててなでじじがとてもいい。

「でも・・・・・・・・ほんとに起きるのがおそいなあ。まつ大丈夫だらうけど。」

大丈夫と自分に言い聞かせる。ほんとの所は不安でしかたないのだけれど。

「早く起きてね・・・・・・・・俺の姫君・・・・・・・・

「はあはあはあ・・・・・。またぐ、一夜のアジトはめぐらなんだ・・・・・・・・・。」

僕は、城を出てか

僕は、城を出てから約1時間以上も、森をさまよっている。けつして迷つてはいけないが森は広い。そう簡単には見つからない。

「くそう・・・・・一夜め。・・・・・早く佐奈を見つけなければ。

「そう、早くしなければ。」  
一夜は、この国でも有名な指名手配犯の

そう、早くしなければ。一夜は、この国でも有名な指名手配犯なのだ。金持ちの家に入つては宝石を盗む。しかも、その後時間をもとに戻して証拠を消すのだ。そんなやつならば、『契約せし者』の佐奈をもとの世界に戻すこともできるはずだ。

そう言いかけたその時！！

ヒロノ

目の前を矢が通つた。その矢は近くの木に刺さつて止まつた。その刺さつた矢をよく見ると何か手紙が結んである。

「なんだこの手紙……」王子へ。佐奈は俺のアジトにいる。返してほしければこの道をまつすぐ進んだところにあるアジトにいい。一  
夜。『なんだと…』

「走り出した。

「無事でいいくれ。僕の姫君。」

「よく来たな。おじけずいて逃げたと思つたよ。」

「なん」とあるかよ。一夜、佐奈はどうだ。

まったく。こいつはいつも俺の作戦に引っかかる。なんで、こんな奴が王子なのかわからない。

「佐奈は奥にいるよ。だけど簡単にほいかせないからね。」

「のぞむところだーー！」

そり、この王子が告げるといきなり拳銃を撃ち始めた。ふつ。弱いこいつなんかにてこずるもんか。

「まだまだだね。王子ちゃん。」

「くそーー。」

王子は感嘆の声を漏らしてこいる。しかしこいつ、昔よりも腕が上がりつている。油断はできない。俺はおもこいつをくじくをこると矢を放つた。

「くつ。」

もう少しの所でかわされてしまった。

（俺の姫君はわたさねえーーー）

普通の布団に寝ていた。

うん。あれ・・・。」「どこだろ。」

辺りを見渡しても知らないところだと分かった。

「あー！ 佐奈が起きた！」

よかたね

「

「俺たちは一宿

「俺がコウ！」

「俺がライ！」

ああ。一回耳鼻科へ行こう。狼がしゃべるなんてありえな・・・・・

「えつ！狼！」

「そうだよー」

うれしーん！・・・・・・・・・おちつけ・・・・・。」これは異世界だ。あり

R No

「それで、どうしたんだ？」

「これは一夜のアシトだよ 佐奈は泣かれねがんばれ!」

「ニルド」今一反廿

「一板の腰の筋肉が死んでしまった。」

「あれ？ 分かんないんだまあいいや。でも、このままだとやばいよ。

「……………分かつた。止めに行く。」

「さっすが！」

そして、私は一人を止めるために一人のもとへ向かつた。  
(どうか、無事でいてください。)

## 第四話『俺の姫君、僕の姫君』（後書き）

どうも、ラッキーラインです。最新、遅れました。すいません。それから前の、後書きで予告していた番外編ですが先に延ばします。本当にすいません。  
ではまた！

## 第五話『佛に、やる気ある女の方』（漫畫）

残酷描寫少しあつ  
「注意トセ」。

## 第五話『争い、そこにあるものは』

「なかなかやるじゃねえか。」

もう、戦いが始まって約一時間もたつ。途中で場所を移動したがその場所が悪かつた。この森は驚くほど広く、まだ僕は全体を把握していない。しかし、相手は天下の指名手配犯だ。かなうはずがない。

「ふん。そんなにやわじやないよ。」

しかしそんな事を言いながらも油断はできない。しかも、さつきから銃を撃ち続けているのにもかかわらず、一回も当たらない。それに比べて僕は一回腕にかすつてしまつた。しかも、その矢に麻酔が塗られていたらしく感覚がまったくない。

「だいぶ、麻酔が効いた?」

「へつまだまだ。」

（お前には負けねえ……………）

「ねえ・・・・・・・・・・。まだなの?」

私たちが出でからもう、30分以上はたつただろうか。一夜と輝は途中で場所を変えたらしく姿が見えなかつた。家から狼三匹の鼻に頼り探ししているのだが一向に着かない。

。一  
ニアム…………はおいは強くなくてるんだけど…………

「だけど？」

「アリでやんす。」

まつたく。あの二人はいつどこで戦つているのだろうか。早く

（お願い、どうぞお手を貸つかないで……）

「王子ちゃん。そろそろ、やられてくんない。」

「いやだ！！！！！」

まったく・・・・・・・・」の王子はものすゞぐく、往生際が悪い。  
とつととやられてもらえれば大歓迎なのが。

「ねえ・・・・・・・・そろそろやつちやうよ、王子ちゃん？」

「へつやれるもんならやつてみなー！」

王子はずいぶん強氣だが疲れてきたらしくさつきから何回も矢にあ  
たつている。もう、ほぼ全身が麻酔によつて感覚がなくなつていて  
はずだ。もう、俺も疲れたし佐奈が来ると困る。もうやつてしまお  
う。

「じゃあね、王子ちゃん。」

俺は、一番強い毒が塗つてある大きな矢を構えた。そして、矢をは  
なつたが・・・・・・・・。

「やめて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・！」

大きな声がしたと思うと案の定佐奈だった。しかも、佐奈は矢の前  
にたつている。

「どけ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！」

そう叫んだがもう遅かった。矢は佐奈の腕に刺さり佐奈の腕からは  
どくどくと血が流れた。

「佐奈・・・・・・・・・・・・。佐奈～～～～～～～～～～～！」

「！！！」

王子は佐奈の元へ駆けつけた。・・・・・・俺は、ただただそ  
こに茫然と立ち尽くしていた。

『あつ！ 佐奈！ 声が聞こえてきたよ！』

うん！！

『アリでやんすーー!』

私はもうくたくたになってしまっていたがやつと見つかったのでもうひとつ踏ん張りだと歩く速度を速めた。しばらくして、一夜の声が聞こえてきた。

『じあね。王子ひさん。』

王子ちゃんまでまさか

『私止めてくるつ――――――』

『まつて！！危ない！！』

『えっ？！』

ぐちょ！ぐしゃ！

激しい痛みが腕を襲う。恐る恐る腕を見ると腕には太い太い太い矢  
が刺さりそこからほどくほどくと赤黒い血が流れていった。

『佐奈…………。佐奈！！』

輝が助けにきてくれたが矢には毒が塗つてあつたらしく意識が遠ざ  
かつていった…………。

## 第六話『大切な人』

「佐奈…………。」

俺は、ただただその場に立ち尽くしていた。まさか、佐奈が自分の打つた矢に当たつてしまつなんて思いもしなかつた。

「おいつ……一夜……佐奈を……よくも打つたな……！」

王子が、俺に向かつて泣き叫ぶ。そこで、また、自分は佐奈を打つたということを思い知らされる。

「一夜……早く、時間をもどせ……さあ、早く……」

「ああ…………。」

俺は、力のない返事をすると呪文を唱えた。

「私は時間を使いしものだ。時神よ今我に力を……」

「…………」  
いつもなら、ここで時間が戻るはずだ。だが…………いつまでたつても時間が戻らない。

「時間が戻らない…………。」

「なんでだ？…………」  
そうか、今日は新月。新月の日は時神から力を借りれない。

「…………」  
といふことは今日一日時間を戻せない。

「佐奈を…………助けられない。」

「くそつ……いつたいどうすれば…………」

「主人……今、佐奈が来なかつ…………えつ……さつ佐奈……！」

「うそだろ…………。主人が、さつ佐奈を打つなんて…………」

「…………」

「主人、どういうことでやんすか！」

「いつもの、狼三匹が俺をにらむ。」

「…………」

「くそつ……僕があの時身代りになつていれば…………」

「…………」

王子が嘆く。しかし、どうしても時間は戻せない。

「…………今何時だ？」

「俺は、ユウに聞いた。が、答えてはくれない。それもそりがう。

一番、信用していた主人が契約せし者を打つたのだ。

「…………俺、佐奈を助けに行つてくる。」

ぐつたりと倒れ、腕から血が流れている佐奈を抱き上げ、家に向かう。

「待てつ！待てつ一夜」

王子が叫んだが、無視してそこから走り去つた。

（どうか…………助かってくれ…………）

俺が、家に着くともう夕方だつた。運んでくる間に佐奈の顔からはだんだん血の気が引いていく。いくら、明日になれば時間を戻せるとはいえ死んだ者は生き返せない。

「佐奈…………。」

目の前に横たわっている姫君に声をかける。だが、返事はない。胸に耳を当ててみると弱い鼓動が聞こえる。

「…………さてと、まず矢を抜かないとな。」

そう言つて、作業に取り掛かる。矢は運よくそんなに深く入つていなかつた。慎重に矢を抜いていく。

「これで、良しつと。…………俺はこの矢で佐奈を打つたのか…………。」

俺は、抜いたその矢をバキヤと真つ二つに折つた。たまらなく、自分が憎かつた。自らの手で、自分の大切な人『佐奈』をなくそうとした自分が。

「佐奈、ごめんね…………。」

やさしく、やさしく、咳く。どうか、瞳を覚まして…………。そして、また…………。

俺の…………大切な人…………。

「一夜め……………」

一夜は今さつきぐつたりとした佐奈をまたさらつていった。

「なあなあ……………まさか、主人が打つなんて…

・・・・・・・・

「うん……………」

「そうでやんす……………」

ショックだったのは、この三匹も同じだつたらしい。かなり、元気がない。一夜はいつもそうだ。仲間を裏切り、大切な者を自分の手で失つていく……………。そうして、いつもいつも、一人で抱え込む。あのときも、そうだつた。あのとき……………正直に話してくれていたら……………こんなことにはならなかつた。僕は、深い深いため息をついた。

「なあ、王子、俺たちで主人……………一夜を探さないか?」

「おまえたちと?」

「うん。人数が多い方がいいし……………いや、乗り気がないんだつたらいいんだ。」

「……………まあ、やつてもいい。」

僕は、ぶつきらぼうに言つた。

「よつしー! そんじやあしゅつぱーーつーー!」

こうして、僕たちは、一夜をいつしょに探すことになった。  
(佐奈、まつてろよつーー!)

## 第六話『大切な人』（後書き）

どうも、第五話の後書きを消したラッキーラインです（・ゞ・）  
いやあ、番外編いつになつたらやれるんでしょうか……  
……。

氣を取り直して、いきましょう。佐奈はこの次点では助かっていません。でも、多分死にません。  
では、また次回！！

番外編！！『春が来た！！エイプリールフールだよ！！』上巻（前書き）

番外編です。本編にはまったく関係ありません。

「ヤッホー！ライ

- 1 -

卷之三

「萬葉集」の題名は、この詩の第一首に由来する。

卷之三

「じゃあ、なんで、あんたが一るのが？」

卷之三

つるさくて、すいません。ちなみに、いつも、最初に言い出すのが

えておくと、便利です。

۱۰۹۰

す。 ああ。 ちがいますよ、 一夜君。 ・・・・・・・・ ていうか犯罪で

「うん、  
そうだけど。

さういふが

!

ブーブーブー

! ! ! ! ! ! ! !

始まり始まり  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

番外編 1 嘘をついても貴女はこちらを見てくれますか?」

——お、い、佐、奈、——！」

あの声は輝だろうか。まだ、朝の5時だというのに何の用だろう。私は、まだ眠気でだるい体を起こして輝のもとへ向かった。

卷之三

ヤバい。頭が狂つたのだろうか。そんなことありえ……

「アーティストでーー！」

窓の外を見ると、真っ赤な夕焼けが広がっていた。やべ、爆睡してしまった。うん。これはまずい。

でも、まだ、

「ん？なんか言つた？」

小さい声で、呴いていたので最後の方はよく聞こえなかつた。

「……………」ついで、今日は、夜によく眠れないと

「思ひのと僕とす」JKLVをしよ!!ーー!!」

「…………ベヘニナナガル」

## 「作戦？成功？」

「あ、なんでもなしなんでもなし、」

なんだか怪しい 煙はなにかを隠している しかも いとも私は  
課で夜風にあたりながら、庭を散歩するのだ。つまり・・・・・  
・・・・・散歩に行かせたくない理由があるはずだ。まあ、  
でもすうへんは嫌いではない。べつにせつてもやらなくていい  
でもいいのだ。

—  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
うん

「ねえ、このかじかへなに? ?」

「え？ これは、僕が作った『佐奈？輝、愛のすごろく』だけど。」

「なかくね? しかかも なんだよこの名前、」

輝が持ってきたすこりくはA4の紙を8枚ほどつなげたくらいの・・・・・・・・・すじく、大きいすこりくだった。しかも、ますも変なものばかりだ。

「まあまあ。せり、せりひや。

そうして、私は、しかたなく、すゝみをやり始めた。

「今何時かしら?」

私はなにげなく時計を見た。

「ダメダメ。時計は見ちゃダメー！」

輝があわててなにかいってきたがきれいに無視した。あわてるのが逆に怪しい。私は、じっくり時計を見た。次の瞬間、私は輝のほう

見ていた

「輝、あんたねえ！！！」

一 ちづちよつと待つて 今田は4月1日なり

「だから、エイプリールフールなんだつて！！」

## お説教開始

## お説教終了

「うめんなやつ。

「まあ、今日はエープリルフールならしようがないわね。」

私はにこりと笑つて言つた。

嘘をつかれても嫌いにならないよ

END

## 番外編！！『春が来た！！エイプリールフールだよ！！』（後書き）

どうも、ラッキー ラインです。ついに書きました、番外編一・今回はもう一話あります。そちらも、見てください。  
ではまた、次回！

番外編！！『春が来た！！エイプリールフールだよー！下』（前書き）

番外編続きです。これで、番外編は終わりです。

番外編！！『春が来た！！エイプリールフールだよ！！下』

「えへ、前回に引き続か番外編です。どうも、ラッキーラインです。  
「やつは。またまた、口か」  
「口か」  
「ライ」  
「でへか。」  
「ちよつとー。また出しゃまつてー。ちよつとせえんつもしなやこよー。

!

二  
四

卷之三

「ふむ、番外編を始めたんだな？　おい！　次はだれだ？」  
あの～。ちょっとお静かに。今回は、一夜君と佐奈ちゃんです。

「は？ また私？」

卷之三

それでは、はつじまつり~~~~~。。

川よ鳴れ！

# 第一話 「そんな、嘘はつかないで・・・・・・・」

イリイリイリイリイリイリイリイリイリ・・・・・・・

•  
•  
•  
•  
•  
•

私は、今日とても気分が悪い。朝、5時に起こされたうえ、エープリールフールという理由で大ウツをつかれたのだ。

「咲いたく……」

そんなふうに独り言をいいながら城の庭を歩いているといきなり体が宙に浮いた。

やあ！佐奈今日はすこいい天気だね！」

うん……こてまたおまえか～！一 夜！ て い う か お る わ や ！ 「

日 おひるがいへが て 今日にいへ は 徒々 徒々 が て

かんこくにいふが和に扱ふにんにかいれに

てきた！！

は、たゞ、佐奈が言ふこと、麗たなしさに、われをしんしゃんよ」

卷之六

その瞬間私の体は中に浮いた。  
きづけば私は一夜に抱きかかえられ

でした

「ハルヒ一樹用膳」

「まあ、そうだけど……………ていうか私の選択権利はないわけ

11

「...」  
ハノグ  
ル

「やだよ~~~~~！~」

卷之三

「着いたよーー！」

「着いたつて…………！」」が街？」

「あれ？佐奈来たことないの？」

「うん…………。てか、おまえに連れ去られたからだよーー！この、馬鹿！！」

私は思いつきり憎しみをこめて言い放った。街は以前、外観は見たが中には入ったことがなかった。まあそれもすべて一夜のせいなのがだが。

「んじゃ行こう！..」

その一声で買い物はスタートした。

「一夜、あんたお金持つてるの？」

「うん。これ。」

「…………何この量……まさか…………。」

「うん。盗んだ！！」

…………そんな声で言つひとか？それ。ていうか強盗じやね。

「…………あんた。こんなに盗んで大丈夫なの？ていうか犯罪なんだけど。」

「えー！大丈夫。証拠消したし。しかも、これが俺の仕事だからさ。これやんないと生きてけないもん。」

「それじゃ、職業変えなさいよーー！」

私は、思わず言つた。その時、ちょうど通りかかった貴婦人がなにかひそひそと話しているのが聞こえた。

「やだわ…………。あのかた、怪盗じやありませんこと。」

「あら……。ほんとだわ。でも、あの隣のかたは契約せし者の佐奈様じやありませんこと。」

「まあ……。きっと騙されてているのよ。かわいそう…………。」

一夜が有名なことは知っていたがこんなことを言われていたとは……。私は思わず顔を曇らせた。

「大丈夫だよ佐奈。俺は平氣だから。」

私が顔を曇らせたのに気付いた一夜は私にやさしげ言葉をかけてくれた。だけど…………一夜の顔は悲しそうに歪んでいた。本当はつらいのだろう。だけど、私を元気づけるために嘘をついているのだろう。思わず私は一夜の手を握っていた。

「…………佐奈？」

一夜が不思議そうに聞いてきた。無意識にやつたことなので言われて改めて気付く。

「いいじやない。別に……！」

強くそう言つと一夜はこつこつと笑つて

「まあ、こーや。」

と言つた。

そのあとも私たちは買い物を楽しんだ…………。

## 番外編！！『春が来た！！エイプリールフールだよ！！』（後書き）

いつも、ラッキーラインです。まず謝罪。  
すいませんすいませんすいませんすいませんすいません  
すいません・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・・・・・・  
輝より一夜の方が長くなつてしましました。しかも、投稿すべく間  
があいてしまいました。

次回からは本編にもどります。ではまた次回！！

第7話『思ひよ届け・・・・・』（前書き）

ひれじぶつの本編です。

規則正しい寝息が聞こえる。佐奈が打たれてから約1時間。俺は、  
ずっと佐奈の看病を続いている。まだまだ危ない状態だがなんとか  
まだ大丈夫そうだ。あと、30分で0時。もう少しの辛抱だ。  
「佐奈……。もう少しだから……。どうか死はない  
で。」

頬につうつと一筋の涙が流れた・・・・・・・・。

「どうだ。臭いは？」  
僕は、今コウ、コウ、ライとともに一夜と佐奈の居所を追っている。  
まあ多分、アジトにもどったろう。

まあ多分、アジトにもどつたらう。

「ハテ 美女達ばかり 一ツ一にいをかキ」

そんが、どうもあいかどい。」

「佐奈、必ず僕が助けるよ。」

ただいま、11時40分。あと、20分で0時だ。はあ……。俺は、小さくため息をつく。あと、20分でも命の危険に繋がる。注意しなければ。本当は、ボスさえいればなんとかなるのだが。ボスは、俺を拾い育てくれた。一体どこに行つたのだろうか。はあ……。俺はまた、ため息をつく。

「佐奈。この思い届くかな。」

佐奈は寝むつたままだ。

「着きやした。」

ただ今、時刻は午後11時55分。今行けばなんとか佐奈を助けられるだろう。一夜の力ではなく僕の力で佐奈を助けたい。

「さあ、行くぞ。」

こうして僕らはアジトへ入つた。

「いいじゃい。よくわかつたね。」

一夜が、やさしく笑つて言つた。

「一夜！！佐奈は！？」

「寝てるよ。危ない状態だけど。」

そういうて、ベットを揃わす一夜

佐奈がいた。まるで、死んでこるようだ。もう、血は止まっている

2分だ。

あと2分だね

一夜か言へ、なんたか今日の一夜におかし、目が死んでしるよ  
つぽどつらいのだろう。まあ、それはそうだろう。一夜は、5年前  
僕の母親を突き落としている。これで佐奈が死んだらまた一夜は自  
分の大切な人を失うことになるのだ。

あと1分

一夜が告げる。その時！！佐奈の容体が急変した。息が荒い。呼吸困難になつてゐる可能性がある。まだ時刻は11時59分。このまでは、一分もつかどうか分からぬ。

一夜にしては珍しくうるたえていた。僕も、どうしていいかわから  
ない。とその時！　日付が変わった。

文を唱える。

「我は時を使い者だ。時神よ今我に力を！！」

「佐奈！…佐奈！…」

私は、名前を呼ばれ目を開ける。どうやら森の中らしい。

「よかつた・・・・・・・・・・。」

目を開けるとユウ、コウ、ライの姿が見えた。

「あれ・・・・・私、矢に打たれて・・・・・・・・・なんで傷がないの？」

「主人と、あと王子が時間を戻したんだ。」

「時間を戻した？どういうこと？」

「あれ？王子から聞かなかつた？こここの世界の奴はみんな時間が操れるつて。」

なんとなく聞いた気がするが・・・・・・そつだつたのか。

「それで、どのくらい前に戻つたの？」

「う～ん。佐奈が一人を止めに行く前くらいかな？」

「そう。ということは、改めて一人を止めなくちゃいけないわね。」

「佐奈、気をつけてよ。」

「分かつてるつて。」

こうして私は、改めて一人を止めるために一人のもとへ向かつた。

「エナ・・・・・輝。佐奈をよろしくね。」

そういうて、一夜がナイフをふりかぶったそのときーーー！

「やめなさいーーー！」

りんとしたかわいらしい少女の声がした。

思い、届いたでしょうか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

## 第7話『思いよ届け・・・・・』（後書き）

いつも、ラッキーラインです。今回はひやしぶりの本編でした。さて、佐奈助かりました。余談ですが、輝は「てる」じゃなくて「ひかる」です。前、友達にこれを見せたとき「てる」とよんでたので・・・・・。

また次回！！

第8話『闇はあべへをのぶ』（漫畫モード）

一夜君、自殺未遂します。残酷描画ごめんなさい注意してください。

卷之三

凛とした声が響く。ああこれは久しぶりに聞くあの佐奈の声だ。

佐奈 こめんね

## 精一杯声を絞り出す

「俺は、佐奈を殺しかけた。だから、俺には佐奈の近くにいる必要がないんだ。だから、さよなら。輝佐奈をよろしくね。」

かがりの力で、彼の姿を想像する

佐奈の叫び声が聞こえた。輝がこちらに来る。そこで俺の意識は途絶えた。

うん！

俺は満面の笑みを浮かべて返事をする。

「俺は、貴族という」と王子の輝とはよく遊んでいた。

輝はとこ書いたかな？！あ！いた！輝み

תְּמִימָנָה. בְּרִיאָה תְּמִימָנָה - אֶתְמִימָנָה

らおかあさんいれてもいい?

卷之三

その返事を聞くとすぐさま輝は鈴女王を呼んできた。鈴王女は白が似合つ。おとなしいひとつより活潑なまつだ。

『あひ、一夜君ほんじつけ。で、輝なにするの。』

『さっきまではかくれんぼをやってたんだけど、鬼ごっこがやりた  
い！』

『じゃあ、鬼ごっこをやつましょ。では、一夜君がおにね。』

「うして、鈴女王を交えた鬼ごっこがはじまた。

『もう、逃がさないぞ！！』

俺は鈴女王を崖のほうへおいつめた。

『新約全書』

卷之二

録女には葬しゆぐふを示したるのと

卷之三

鈴女王は闇の中へ落ちていった。



## 第8話『闇はすべてをのむ』（後書き）

いつも、ラッキーラインです。今回は、一夜君の過去が入ってきてます。一夜君の過去編はもうすこしあとにかく予定です。さて、次回は佐奈視点です。ではまた次回ーー！

## 第9話『泣かないで……』

「一夜！一夜！いやあああ…………！」

佐奈が、一夜の腕から大量に流れる血を見て悲鳴を上げる。まさか、一夜がそんなにショックをうけているとは思わなかつた。僕は、佐奈の肩を撫でながらそつとつぶやいた。

「大丈夫。一夜はそんな簡単には死なないよ。」

佐奈の耳には声が届かなかつたらしくまだ泣きしづけている。佐奈は泣き過ぎて目が赤くなつてしまつていて。

「一夜を、僕の城に運ぶよ。」

この言葉を聞いた佐奈は、一旦泣くのをやめた。

「城には、いぶ？」

ずっとつないでいたからか言葉が途切れ途切れになつていて。

「このまま見殺しには出来ないだる。……一夜は僕の親友なんだからな。」

「え…………。」

佐奈がびっくりしたような顔をする。このあと後で話しておいつ。まずは、一夜を運ぶのが先だ。

「コウ、コウ、ライ。一夜を背に乗せて走れるか？」

「大丈夫でやんす！」

「じゃあ、乗せてつてきれ。急いでだぞー！」

「…………」

コウ、コウ、ライはいい返事をすると一夜を乗せて走り出した。

「佐奈。僕たちも行こいつ。」

「うん…………。」

僕と佐奈はコウ、コウ、ライの後を追つて走り出した。

「おかれりなさいませ輝様……そつそのかたはっ?!」

「僕の親友だ。毒が塗られているナイフが腕に刺さつていて危険な状態だ。今すぐ医者を。」

「はつはい！」

じいは急いで医者を手配し、部屋も用意してくれた。

「まだ、全身に毒はまわっていないですが、一応解毒効果が期待できる薬をうつておきました。それと、傷がふかいのでなるべくうでを動かさないよう言つてください。」

「ありがとう」「ざこます。」

医者は、急なことにも関わらず丁寧にみてくれた。おかげで大事に至らずにすんだ。

「一夜…………よかつた…………。」

佐奈はだいぶ落ち着いていた。さすがに来る途中ではないたりしていたが落ち着いてよかつた。

「佐奈。一夜は、いい奴なんだ。なんで、泥棒になつたのかは知らないけれど根はすぐやさしいやつなんだ。だからこそ佐奈を傷つけてしまつたことによるショックが大きかつたんだろう。」

「うん……。でも、さつき輝が一夜は親友だつて言つてたけどなんで? 一夜と輝は敵同士じゃないの?」

「確かに、僕と一夜は敵同士だ。だけど元々は

「元々は?」

「元々は一夜は貴族なんだ。」

「ええ! そんな、じゃあなんで指名手配犯に?」

佐奈は、やはり知らなかつたらしい。このさうすべて話してしまお

う。

「話さう。僕と一夜の全てを

。」

過去編『輝の過去ー』（前書き）

輝過去編。一夜過去編もちよつとほこつてます。

## 過去編『輝の過去1』

『輝～！はやくはやく～！』

『待つてよ～！一夜。』

僕と一緒に夜は小さい頃からよく遊んでいた大親友だった。一夜の家は上流階級の貴族の中でも一番王室に近い貴族だった。だから、一緒に遊ぶことが多くとても仲がよかつた。

『輝～。一夜君～。おやつがありますよ～！』

僕の母さん……レイ女王は戦争で死んだ僕の父さん……光星国王の代わりに国の頂点に君臨していたんだ。でも、休みの日は母さんと僕と一緒にお茶会をしたり遊んだりしてたんだ。母さんは日だまりのようになんかくてやさしい人だったんだ。

『今日のおやつはクッキーよ。』

『わーい！クッキー僕好きなんだ～！』

『俺も～～！』

『たくさん召し上がれ。』

『『いただきまーす！～！』』

母さんが焼くクッキーは甘くてとてもおいしいんだ。だから、一夜も僕もクッキーが大好きだったんだ。

『ふう。おいしかっただ。』

『うん。おいしかったね。』

『なにして遊ぼうか？鬼ごっこなんてどう？』

『いいね！母さんは？』

『そうね……』

『レイ女王様。大臣がお呼びです。』

『あら、大臣が？ごめんね輝。私はやれなくなっちゃったから一夜

君と仲良く遊んでなさい。』

『はーい。』

母さんは、いろいろと忙しくて休みの日も仕事があつたくらいだつ

たんだ。

『一夜～。なにして遊ぶ～？』

『うーんとね……。』

『輝様。勉強の時間ですよ。』

『えええ～～～！僕、一夜と遊びたい。』

『だめですよ。さあ、先生がお待ちですよ。』

『むう。しょうがないなあ。一夜、僕勉強しなくちゃいけないから、また明日遊ぼうね。』

『うんっ。また、明日ね～～～！バイバーイ！』

僕もいろいろ忙しくって遊んでる途中で勉強しなければならない時があつたんだ。だから、一夜にはときどきさみしい思いをさせていたかもしれないね。それに、一夜の家は家庭事情が難しくて父親が3回も再婚してるから母親がころころかわってかわいそがつた。でも、一夜は元気いっぱいで今よりも明るかつたんだ。……僕の母さんが死ぬ…いや殺されてしまつまでね。

ある日のことだつた。僕と一夜と母さんは広い草原に來ていたんだ。

『わー！す、ごい！広ーい！』

『うんっ！広い広い！』

『そうねえ。』

『ねえ、母さんなにかして遊ぼうよ。』

『いいわよ。一夜君は？』

『俺も一緒に遊ぶ！』

『じゃあ、鬼ごっこしよう～。』

『うんっ！』

『じゃあ、俺が鬼ね。』

僕達はいつものように鬼ごっこをはじめた。だけど……場所がわるかつた。まさか、母さんが死ぬことになるとは思いもしなかつた……。

過去編『輝の過去2』（前書き）

輝過去編パート2

「待たない——！」  
一夜は、昔から走るのが早く、輝よりも馬術や剣術に冴えていた。

夕子が泣き止んでしまった僕は、一夜を追いかけてかおいでから、あきらめて母さんにタッチした。

あら、  
私が鬼ね

『一ノ山』

卷之三

母さんが、急いで一夜を追いかけタツチする。

また俺が鬼かよ

一夜は母さんと一緒に谷のほうへ行つた。

一夜が泣きながら走り去つていいく。不思議に思い谷底をみた。する  
と

『かつ母さん！？』

母さんが血まみれになつていた。

「カアサンガ、ナンテシンデルノ？ナンテ、モシカシティチヤガ  
オトシタンジヤ？キツトソウダ！イチヤメ…………」

『一夜…………！いつたいなにがあつたんだ？』

僕は、その場に立ち尽くした

。

過去編『輝の過去3』（前書き）

輝の過去編パート3。

『母さんー母さんー母さんー……』  
しばらく僕は泣き叫んでいた。一刻も早く、城のだれかに言わなければならぬのだがそれができなかつた。自分が、父の代わりに母さんを守りつゝ想つていたのに守つてあげられずたえきれなかつた。

しばらく、なにも考えず立ちぬくこと母さん専属の執事の璃御がやつてきた。

『輝様、どうされたのですか？それに、女王さま……。』

『…………だ。』

『いついまなんと？！』

『だから……母さんは、一夜にかけからつきおとされて死んだんだ……。』

『本当でござりますか！？』

『僕、信じたくないんだ……。だつて、だつて母さんが死ぬわけないし、一夜がそんなひどいことをするわけがない……。けど、本当なんだ……。』

『そうですか……。一夜様が女王様を……。』

『…………でも、でも一夜は、一夜は……。』

『…………あつと一夜は、わざとじやなくてきつとせつと偶然母さんがおちてしまつたんだ……。』

僕は、そう考えて璃御にそう告げただが……。

『いえ。それはちがうでしょ！』。これはあつとわざと落として王

室の力を弱めようとしたにちがいありません。』

無表情な顔で璃御は淡々と告げる。

『一夜様……いや、犯罪者なんですから呼び捨てでいい。……一

夜、絶対に捕まえてやらなければ。』

『ねえなんでなんで一夜が犯罪者なの? 事故なのに? おかしいよ! 一

夜はそんなことする奴じやない!』

『おかわいそうな女王様。幼い輝様を残して暗殺されてしまうなん

て……。捕まえたなら絶対に処刑にしてやらなければなりませんね

……。』

『ちがう! 暗殺なんかじやない!』

『輝様は、だまつて待つていてください。警察を呼んで来ます。』

『ちがうんだ! 一夜は一夜は一夜は絶対にそんなことするはずがな

いんだ! ! ! ! !』

僕は、その場で叫んだ。

## 過去編『輝の過去4』（前書き）

輝の過去編パート4。これで輝の過去編は終わりです。

## 過去編『輝の過去4』

『さよなら、母さん。』

今日は、母さんの葬式。僕は、まだ八歳。この若さで両親を失い、国王といつ地位に立つことになってしまった。周りはみんな

『おかわいそうに…………。』

『この歳で国王だなんて…………。』

と口々に言っている。それはいいのだが

『確かに、あの貴族の一夜つていう八歳くらいの子供が殺したんでしょう。』

『なんて子供なんでしょうね。まるで悪魔よ。』

こういう、一夜の悪口は聞いていて腹がたつてくる。だが、一夜が突き落としたのは事実だ。そういうわれてもしかたないのだろう。でも、でも…………。やはり、親友の悪口はいやなものだ。気付いたら僕は周りに向かって叫んでいた。

『一夜は悪くないよ！きっと、事故だつたんだよ！』一生懸命伝える。しかし…………。まわりの大人は否定してばかり。嫌になつて僕は、森へ抜け出した。

『母さん。』

空を見上げてそう呟く。その時――

『おまえさんか。一夜の親友は。』

かすれかかった男の声が後ろから聞こえた。

『だれだつ！』

僕は後ろに振り返つてまじまじと声の主をみた。

『俺は、<sup>とわ</sup>永久。

一夜は、俺が拾つて育てることにした。』

『本当！じゃあ、一夜にはまた会えるんだね。』

僕は、興奮して聞く。

『いいや。もう、友達としては会えない。会えたとしたら次<sup>よ</sup>は……敵同士だ。……じゃあな。』

『あつ！』

その、男はそれだけのことしてきた……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6479q/>

---

契約に御用心

2011年10月8日13時13分発行